

でんでら通信 第四百十九号 令和八年九月

秋の永代供養会

九月二十八日(月) 午後二時より

法話 本山巡教師 華山 泰玄師

みなさまのご参詣をお待ちしております。

坐禅会

九月三十日(水) 十時 ご参加お待ちしております。

老人力

九月二十一日は敬老の日です。敬老の日は、多年にわたり社会に尽くしてきた高齢者を敬愛し、長寿を祝う国民の祝日です。二〇〇二年(平成十四年)までは毎年九月十五日を敬老の日としていましたが、二〇〇三年(平成十五年)から今のように、毎年九月の第三月曜日と定められています。

歴史としては一九四七年に兵庫県多可郡野間谷村(現・多可町)で行われた「としよりの日」が発祥とされ、一九六六年(昭和四十一年)に国民の祝日となりました。

さて、みなさんは、老人力という言葉をご存じでしょうか。1998年の年末の流行語大賞では、受賞とはなりませんでしたが、最後の一〇候補に入った流行語です。

老人力(ろうじんりよく)は、作家、赤瀬川原平が一九九七年に提唱した概念。これは「物忘れが激しくなった」など老化による衰えというマイナス思考を「老人力がついてきた」というプラス思考へ転換する逆転の発想からの言葉です。

赤瀬川自身は、ふつうは歳をとったとか、モロクしたとか、あいつもだいたいボケたとかいうんだけど、そういう言葉の代りに、

「あいつもかなり老人力がついてきたな」というふうに使いたい、と言います。そうすると

何だか、歳をとることに積極性が出てくる、と。

うーん、言葉はいいですが、結局は、物忘れ、繰り言、ため息等、従来の、ぼけ、耄碌(もうろく)として嫌って避けられた現象に変わりはありません。

しかしどんなにすごい人でも、寄る年波には勝てず、いつかは老いるのが現実です。その老いもいきなりではなく、毎日少しずつ進んできますし、人それぞれであります。

若いのに老人力が発揮されている人もいれば、外見上は相当、年老いているようにみえるのに、しっかりとした老人力のない人もいます(私的にはNHKのど自慢に出てくる人は、老人力が薄い人にもえます)

たとえ老人となっても、今までに培った知識、技術が他の模範となれば、周囲からはリスペクト(尊敬)されます。

昔のテレビ(ブラウン管)は、映らなくなったら、叩くとなおる、ということがありました。「テレビが映らないよう」という孫に、

「どれ、おじいちゃんがおしたるわ」と言つて、「バン」とテレビの上や横を叩く。すると、あら不思議、ふつうに映る。

「おじいちゃん、すごい！」と孫に言われおじいちゃん鼻高々という光景がありました。長年やってきた経験からで、なぜ叩くと映るのかはおじいさんも知りません。体験による行動です。

結局のところ、昔のブラウン管テレビは、アナログ部品が多く、熱や経年劣化によって接触不良が起きやすかった。そこに振動を与えることで、一時的に状態が戻るというものでした。単なる迷信ではなく、物理的な理由があったのです。

しかし時代が流れ、今やITの時代となつて、叩いても治らない時代となつてしまいました。経験豊かなおじいさんの力もかなわなくなつてしまいました。今となつては、昔はいい時代だった、ということです。

仏教における四苦とは、生、老、病、死を指し、人が生きていく上で避けて通れない苦しみがあります。この四苦をなんとかならないかと、人類は医学の向上、発展を進めてきました。それでもまだ不老不死の薬は発明されていません。ならば、それを理解したうえで、受け入れていくしかありません。生の悩みや苦しきも、老いの寂しさも、病の不安も、死への怖れもこの世に生まれてきた以上避けて通れないのです。

長年生きてくれば、老人力が増してくることはしかたないことです。それでも前向きに考え、生かさせていただいているのだ、と感謝していきましよう。